宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要　第27号，103－117，2019

中学校知的障害特別支援学級卒業生保護者への追跡調査からみる特別支援学級でのキャリア教育の成果と課題

水谷　泰[2)]・日野文貴[2)]・髙野睦美[1)]・瀬川大輔[1)]・外山千佳[1)]
黒木　恵[1)]・田邊美穂[2)]・黒木弘子[2)]・武富志郎[3)]・戸ヶ崎泰子[4)]

Results and Issues for Career Education in Special Needs Classes judged from Graduates' Parents in an Intellectual Disabilities Special Needs Class of the Junior High School

Yasushi MIZUTANI，Fumitaka HINO，Mutsumi TAKANO，
Daisuke SEGAWA，Chika TOYAMA，Megumi KUROKI，
Miho TANABE，Hiroko KUROKI，Shiro TAKETOMI，& Yasuko TOGASAKI

Ⅰ　問題と目的

特別支援学校高等部の知的障害のある卒業者の就職率は，平成28年度の全国平均が32.1％，平成29年度は32.9％と年々増加傾向にあるものの，その割合は高いとは言い難い（文部科学省，2017，2018）。宮崎県内の特別支援学校高等部卒業者の就職率は，平成28年度が26.5％，平成29年度が19.9％と全国平均を下回っており（宮崎県教育委員会，2017，2018），キャリア教育の更なる充実が必要な状況である。

中央教育審議会（2016）は，「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」において，「学校と社会との接続を意識し，子どもたち一人一人に，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育み，キャリア発達を促すキャリア教育の視点も重要である」と述べている。また，特別支援学校教育要領・学習指導要領（2018）でも，「児童または生徒が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること」と，キャリア教育の充実のことがより明確にされている。このように，昨今の「若者の社会的・職業的自立」や「学校から社会・職業への移行」を巡る様々な課題の解決に向けて，小学校から高等学校，また小学部から高等部までの学校の教育活動全体を通じて，「働くこと」に必要な資質・能力の育成を図っていくことが重視されている。

このような社会情勢や社会の要請をふまえて，特別支援学校等におけるキャリア教育に関する研究や実践がより一層推し進められるようになってきた。藤井・小田原・西・向井・林・若松（2016）は，就労の現場においては，コミュニケーションや人間関係形成にかかわる力や課

[1)] 宮崎大学教育学部附属小学校　[2)] 宮崎大学教育学部附属中学校　[3)] 宮崎大学大学院教育学研究科
[4)] 宮崎大学教育学部

題を遂行する力，任務を適切にこなせたかどうかを自己評価する力，さらには将来にわたって主体的に生活していく力等が必要であると述べ，社会的・職業的自立のための指導内容を教育課程に位置付ける工夫の必要性を指摘している。そして，それまで「職業生活」や「生活単元学習」で指導してきた①職業に関する内容，②家庭生活に関する内容，③将来の社会生活に関わりの深い内容を整理し，単元構成や指導時数を見直して，「キャリアマネジメント」という科目を新設し，その教育的効果を検証している。その結果，生徒の学習意欲や保護者のキャリア教育への関心の高まりにつながったことを明らかにしている。また，日野・村社・矢動丸・的野・外山・児玉・山田・信時・戸ヶ﨑（2016）は，「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」を作成し，児童生徒のキャリア発達上の課題をふまえながら，体系的なキャリア教育を実施している。そして，「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」を用いて児童生徒のキャリア発達上の重点指導課題を確認し，それに応じた指導の工夫を行うことは，キャリア発達に関連する能力やスキルの向上に有効であったと報告している。

しかし，学校でのキャリア教育で育んだキャリア発達に関連する能力やスキルが学校卒業後も維持され，それぞれの進学先での将来の自立に向けた学びや就職先での仕事に生かされているかが十分に明らかにされているとは言い難い。藤井・川合・落合（2014）は，知的障害特別支援学校高等部での就労移行支援の課題を明らかにするために，全国の知的障害特別支援学校高等部の進路指導担当教員に質問紙調査を行っている。そして，生徒のキャリア形成のための能力獲得を促す指導方法や評価方法の確立が不十分であること，生徒の職業的能力に対する保護者の評価と教員の評価との乖離や生徒の職業的自立の必要性に対する保護者の意識形成ができていないことを明らかにし，根拠に基づく効果的な指導法を確立していくことや，保護者と学校が共通認識を図った上で連携していくことの必要性を指摘している。また，定岡（2017）は，知的障害特別支援学校高等部の卒業生に対する職場定着の支援について，６名の卒業生の就職先企業や支援機関に調査を行い，学校段階から「学ぶこと」「働くこと」「生きること」を関連づけながら，就労継続できる力を育成することが必要であることを明らかにしている。

しかし，これらの研究は特別支援学校高等部でのキャリア教育を教員の視点から検証したり，就労後の職場定着の状態を企業や支援機関の視点から検証したりしている研究であり，中学校段階でのキャリア教育の課題や保護者から見た中学校でのキャリア教育の成果や課題，保護者が学校に期待しているキャリア教育の内容については明らかにされていない。したがって，生徒の成長や変化を最も近くで感じている保護者を対象として，中学校特別支援学級のキャリア教育の成果や課題を検証することが必要だと言える。しかし，現在中学校特別支援学級に在籍している生徒の保護者の多くは，将来の就労や生活などの進路に関する情報を集め，将来の生活や就労について模索している段階であり，キャリア教育の課題を指摘することは難しいことが考えられる。

そこで本研究では，中学校の知的障害特別支援学級の今後のキャリア教育を考えていくために，現在高等学校や特別支援学校高等部で学んでいる中学校特別支援学級の卒業生の保護者に聞き取り調査を行い，①それぞれの進学先でどのような学校生活を送っているか，②中学校でのキャリア教育の効果に対する捉え方，③今後の就労に向けてどのような能力・スキルの成長を期待しているかを明らかにする。そして，中学校特別支援学級でのキャリア教育が，生徒のその後の学びや将来の社会的・職業的自立にとって有益なものとなるには，どのような指導が効果的であり，またどのような改善が必要なのかを考察する。

Ⅱ　方法

1　調査対象

M県内の中学校特別支援学級を20XX年３月～20XX＋１年３月に卒業した生徒の保護者計10名に調査依頼をし，了解が得られた６名（有効回答率60％）を調査対象者とした。

2　聞き取り調査の内容

（１）現在の進学先での生活状況

現在の学校生活で，子どもが「楽しい」と言っていることがあるかとその具体的な内容を確認した。また，現在の学校生活で，子どもが「困っている」と言っていることがあるかとその具体的な内容について確認した。

（２）現在の学校を卒業した後の希望進路

現在在籍している学校を卒業した後，どのような進路を考えているかについて，「一般就労」「福祉的就労」「進学」「就職しない」の４つの選択肢の中から選択するよう求めた。「一般就労」や「福祉的就労」を選択した場合は，保護者や本人が考えている職種や事業所等を尋ねた。「進学」を考えている場合は，その希望進学先を確認し，その後の就職希望の職種等を尋ねた。

（３）将来の生活や就職に対する不安

子どもの将来の生活や就職に対する不安の有無とその内容について確認した。

（４）中学校でのキャリア教育の効果

中学校のキャリア教育で伸ばしてきた子どもの「人間関係形成・社会形成能力」,「自己理解・自己管理能力」,「課題対応能力」,「キャリアプランニング能力（仕事に関すること）」,「キャリアプランニング能力（生活に関すること）」が，進学先での学びに役立っていると感じているかについて，４件法（４：とても感じる，３：少し感じる，２：あまり感じない，１：まったく感じない）で回答を求めた。また，その選択肢を選んだ理由を，普段の子どものどのような姿から感じるのかについて尋ねた。

なお，中学校のキャリア教育で伸ばしてきた５つの能力については，保護者が理解できるように,「相手の考えを理解したり，自分の考えを正しく伝えたりして人と関わる力（人間関係形成能力）」,「仲間と協力したり，自分の役割を果たしたりして社会に参加する力（社会形成能力）」,「自分のことを伝えたり，自分のできること，やるべきことを理解して行動したりする力（自己理解能力）」,「自分の感情をコントロールし，自分から進んで学ぼうとする力（自己管理能力）」,「自分で目標や計画を立て，課題を解決するために実行する力や実行した後に自分が立てた目標や計画をふりかえる力（課題対応能力）」,「社会のきまりや働くことの目的，また自分の立場や役割を理解して仕事に取り組む力（キャリアプランニング能力：仕事）」,「様々な情報に関心をもち，自分の好きなことや自分に必要なことに意欲的に取り組む力（キャリアプランニング能力：仕事）」,「自分で先の予定や身の回りのことを管理し，規則正しく生活する力（キャリアプランニング能力：生活）」,「自分で体や服装を清潔に保ち，健康に生活する力（キャリアプランニング能力：生活）」と説明した。それでも保護者がキャリア教育の具体的な指導内容をイメージすることができないときは，具体例を挙げて補足説明をした。

（５）今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキル

子どもの将来の自立や社会参加に向けて，今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルについて自由回答を求めた。

3　質問紙調査の内容

（1）キャリア発達の状態

子どもの現在のキャリア発達の状態を確認するために，「特別支援学級におけるキャリア発達段階評価票」（日野ら，2016）の項目表現と評価方法を，保護者が理解し評定できるように修正した評価票を作成した（Table 1）。評価方法は，（2：一人でできる　1：一人ではできない）の2件法とした。

4　調査手続き

調査対象となる卒業生の保護者に，事前に電話連絡を行い，調査への協力を依頼した。その上で，依頼状と聞き取り調査項目のリスト，及びキャリア発達の状態を評価する調査票を送付し，協力の承諾が得られた保護者と聞き取り調査実施日程の調整を行った。聞き取り調査の際には，個人情報の取り扱いについて説明し，録音の許可が得られた保護者のみＩＣレコーダーで聞き取り調査時の発言を録音した。聞き取り調査には半構造化面接法を用い，調査に要した時間は一人平均1時間であった。

5　調査期間

調査期間は，20XX＋2年9月6日から9月14日であった。

6　倫理的配慮

調査対象者には，研究の趣旨を伝えた上で，調査協力は任意であること，個人が特定されない形でデータ分析すること，個人情報の取り扱いには十分注意することを記載した文書を配付し，文書による同意を得た。

7　調査結果の集計及び分析方法

聞き取り調査で得られた保護者の発言内容は，調査内容毎にＫＪ法を用いて分類した。ＫＪ法による発言内容の分類は，第1筆者から第3筆者の3名で行った。質問紙調査で確認した現在のキャリア発達の状態については，卒業生それぞれの中学3年生10月時のキャリア発達の状態と比較した。

なお，20XX年3月の卒業生の中学3年時の状態は4件法（「通常の学級・特別支援学級においてできる：4」，「特別支援学級においてできる：3」，「教師が言葉かけをしてできる：2」，「教師と一緒にできる：1」）で評定していたため，4と3の評定結果を「一人でできる：2」，2と1の評定結果を「一人ではできない：1」とした。20XX＋1年3月の卒業生の中学3年時の状態は3件法（「自分でほぼできる：3」，「教師が言葉かけをしてできる：2」，「教師と一緒にできる：1」で評定していたため，3の評定結果を「一人でできる：2」，2と1の評定結果を「一人ではできない：1」とした。

その上で，中学3年時と現在のキャリア発達の状態を比較した結果が，中学3年時も現在も2のときは「卒業時の良好な状態を維持している：◎」，中学3年時は1だが現在は2のときは「卒業時より向上している：○」，中学3年時は2だが現在は1のときは「卒業時の状態より低下している：△」，中学3年時も現在も1のときは「卒業時の未獲得状態のまま：×」と判断・整理した。

Table 1　子どもの現在のキャリア発達の状態を確認するための評価項目

領域	育てたい力	キャリア発達段階
人間形成・社会形成能力	人とのかかわり（反応）	1　言葉かけや呼名ではっきり返事をすることができる
		2　指示を受けたときに適切な返事をすることができる
	他者理解	1　相手の気持ちを考えることができる
		2　相手の気持ちを考えて行動することができる
	協力・共同	1　友達と協力して活動できる
		2　集団の一員としての役割を理解し，協力して活動できる
		3　友達や周囲のことを思いやった行動ができる
	意志表現	1　「おわりました」「できました」等の報告ができる
		2　相手の意見を聞いて，自分の意見を言うことができる
		3　集団の中で意見を聞いて，自分の意見を言うことができる
	場に応じた言動	1　自分で判断し，場に応じたあいさつや身だしなみができる
		2　様々な場面で，自分で判断し，場に応じたあいさつや身だしなみができる
		3　様々な場面で，目的に応じた行動ができる
自己理解・自己管理能力	自己理解	1　自分のできることが分かる
		2　自分の長所が分かる
		3　自分の性格，趣味，適正，短所などが分かる
	ストレスマネジメント	1　ストレスへの対処法を理解し，活用することができる
課題対応力	目標設定	1　目標に向け，取り組み方法が分かる
		2　目標に向けた取組ができる
		3　活動をふりかえり，新しい目標を設定できる
	選択（決定・責任）	1　やらなければならないことを理解し，取り組むことができる
		2　選択したことを最後まで責任をもってやり遂げることができる
		3　自分の将来について考える。保護者と話し合って進路を選択できる
	肯定的な自己評価	1　「できた」「まあまあ」「もう少し」などの自己評価を客観的にできる
		2　自己評価をもとに次にどうすればよいかを考えることができる
		3　活動の場面でのふりかえりとそれを次に生かそうとすることができる
キャリアプランニング能力（仕事）	情報の収集と活用	1　身近なもの，人から知りたい情報を得ることができる
		2　情報を得る方法が分かる
キャリアプランニング能力（仕事に関すること）	情報の収集と活用	3　本・広告・メディアやパソコン等，様々な方法で情報を得ることができる
		4　得た情報を適切に取捨選択できる
	社会のきまり	1　学校でのきまりを守ることができる
		2　社会にもルールがあることが分かる
		3　社会のルールを守ることができる
	働くことの意義（職場体験学習）	1　みんなと一緒に職場体験学習に取り組むことができる
		2　「働く」ことを意識し，興味・関心をもって職場体験学習に取り組むことができる
		3　課題意識をもって職場体験学習に主体的に取り組むことができる
	働くことの意義（進路学習）	1　進路学習をとおして卒業後は仕事をすることを理解することができる
		2　学校での進路に関する学習に進んで取り組むことができる
		3　自分の進路に関心をもつことができる
	働くことの意義（仕事への理解）	1　自分が利用する店や施設で働く人に関心をもつことができる
		2　自分の周りで働く人の職業の種類と内容を理解することができる
		3　支援学校高等部や高等学校卒業後の様々な進路について理解することができる
	夢や希望	1　様々な仕事に関心をもつことができる
		2　自分の得意なことをふまえて，将来就きたい仕事を考えることができる
	生きがい・やりがい	1　好きな活動をきっかけに他の活動にも目を向け，意欲をもって取り組むことができる
		2　活動を最後までやりとおすことで，充実感や達成感を味わうことができる
		3　様々な活動に意欲をもって取り組むことができる
	進路計画	1　福祉施設等での見学・体験をとおして，様々な職業があることが分かる
		2　福祉施設での見学・体験をとおして，将来を考えることができる
		3　学校卒業後の将来を見据え，（それにつながる）進路を決定できる
キャリアプランニング能力（生活に関すること）	金銭の管理	1　金額が分かり，少額で決まった額の買い物ができる
		2　予算内で選んで買い物ができる
		3　予算内で目的に応じた買い物ができる
	習慣形成	1　次に何をするのかが分かり，日課に沿って行動することができる
		2　一週間の予定が分かり，カレンダーや予定表を見て学校行事や家庭の予定等に従って行動することができる
		3　基本的な生活習慣（規則正しい生活・時間管理・体つくり・健康・清潔等）を身に付けている

Ⅲ　結果

1　調査対象者の進学先や希望進路，中学校でのキャリア教育の効果

Table２に示す通り，調査対象者の卒業後の進路は特別支援学校高等部や高等学校普通科と様々で，希望する就労形態や職種についても多様な希望を持っていることが確認された。また，中学校でのキャリア教育の効果については，ほとんどの保護者が効果を感じていることが明らかにされた。

具体的にはTable３に示すように，対象者Ａの保護者は，毎日の自宅学習，公共交通機関の利用，スケジュールや体調の管理等ができるようになったと，「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力（生活）」に関わる事柄についての効果を高く評価していた。対象者Ｂの保護者は，周囲の友達に声掛けやサポートができるようになった，目標や計画を立てたりすることができるようになったと，「人間関係形成・社会形成能力」や「課題対応能力」が向上したことを高く評価していた。しかし，Table２に示すように「キャリアプランニング能力（仕事）」については，効果を全く感じていないと評価していた。

対象者Ｃの保護者は，決まりを守ったり，長期休暇中の宿題に計画的に取り組んだりするようになったと，「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力（仕事）」が向上したことを高く評価していた。対象者Ｄの保護者は，自分の気持ちを伝えられるようになった，スケジュールを意識できるようになったと，「人間関係形成・社会形成能力」や「キャリアプランニング能力（生活）」に関する事柄をキャリア教育の効果として挙げていた。

対象者Ｅの保護者は，学校の連絡事項のメモを取るようになった，予定を確認したり，スケジュールを立てたりすることができるようになったと，「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力（生活）」が向上したことを高く評価していた。

対象者Ｆの保護者は，リーダーとしての役割を果たすようになったこと，自分で目標を考えて実行できていること，長期休業中の課題に計画的に取り組むことができるようになったことなど「人間関係形成・社会形成能力」や「課題対応能力」が向上したことをキャリア教育の効果と認識していた。

Table２　調査対象者の属性や希望進路，中学校でのキャリア教育の効果

対象者	卒業後の進路	現在の学校卒業後の希望進路	中学校でのキャリア教育の効果					
			人間関係形成・社会形成	自己理解・自己管理	課題対応	キャリアプランニング（仕事）	キャリアプランニング（生活）	計
A	高等学校普通科	進学した後一般就労	4	3	3	4	4	18
B	高等学校普通科	一般就労	4	3	3	1	2	13
C	特別支援学校高等部	福祉的就労	3	4	3	4	4	18
D	特別支援学校高等部	福祉的就労	4	4	4	4	4	20
E	特別支援学校高等部	福祉的就労	3	3	4	4	4	18
F	高等学校普通科	一般就労	4	4	3	3	3	17

中学校でのキャリア教育の効果を「とても感じる」は4，「少し感じる」は3，「あまり感じない」は2，「まったく感じない」は1

Table３　中学校でのキャリア教育の効果を感じる具体例

領域	対象者	キャリア教育の効果を感じる具体的な姿
人間関係形成・社会形成能力	A	・まだまだ足りないが，「連絡」はできている
		・嫌なことがあったことは言えていると思う。新しい場所でできるかは不安
	B	・活動がなかなかできない友達に，声掛けやサポートをしている。参観日で見たり，先生から話を聞いたりした。
		・中学時代から，作業班員の面倒をよく見ていた。
	C	・決められたことを守り，自分のしたことの報告などはちゃんとできている。
	D	・自己紹介や自分の気持ちを伝えることは，中学校時代に繰り返し取り組んだのでできるようになった。
		・放課後デイで，下級生とゲームをしているとき，わざと負けてあげる姿があった。
	F	・家では甘えもあるが，学校ではこれらの例示された事項はできていると思う。
		・委員長にも立候補した。支援学級で代表の役割をたくさんできたことが大きい。
		・修学旅行では，代表のあいさつをした。
		・部活動では「仮キャプテン」となり，事実上キャプテンのような存在になっていた。
自己理解・自己管理能力	A	・就業体験学習で公共交通機関を使って行けた。バスの時刻表やニモカも使えた。
		・自力登校は本人の力になるのでやらせるべきと思う。趣味にもつながっている。
	B	・ちょっとしたケンカで，きちんと謝ることができる。ひきずらない。
	C	・通学中，自転車がパンクした際，学校に携帯で学年や名前，「パンクしたので歩いてくる。遅れます。」と理由を伝えていた。初めてできるのだと気付いた。
	D	・中学時代に作業学習や学校行事等の授業の最後にふりかえりをして発表したり，日記でふりかえりを書いたりしていたので，しっかりできている。
		・学校ではもちろん，家庭でも学習に関して予定を立てて行うことができる。
	F	・自分の気持ちを伝える大切さは，家でもよく話をしている。
		・リーダーとしての経験が役に立っている。高校でも様々な場面で活躍することができた。
課題対応能力	A	・毎日の宅習や日記を忘れない。何時から宿題をするかも，見たいテレビの時間に合わせて自分で決めている。
	B	・目標を立てたり，計画を立てたりすることができる。
	C	・夏休みなど長期休暇のとき，宿題などが早めに終わるように自分で計画し，終えている。
課題対応能力	D	・中学校特別支援学級内での役割分担の経験が生きている。
		・テレビやタブレットから情報を収集している。
	E	・小・中学校の経験があって，高等部の就業体験学習にも安心して取り組むことができている。
		・学校でスケジュールを立てる経験からか，夏休みになると，スケジュールを自分で立てている。
		・プリントでは，ふりかえることができているが，行動に表れていない。
	F	・目標等を考えて実行できている。
		・夏休みの課題を計画的に取り組むことができた。
キャリアプランニング能力（仕事）	C	・本人の特性が白か黒かはっきりしているので，決まりやルールは守られている。
		・委員長になるなど，自分のやりたいことやしたいことができている。
	E	・最近，任せたことを最後まで一生懸命できていると担任から聞いた。
		・学校で話があるとメモを取っている。修学旅行に行くのでパソコン貸してと言い，食事の場所の確認をしていた。
	F	・ワープロ検定のような資格を取った。
		・中学時代から責任をもって自分の役割を果たすことができていた。
キャリアプランニング能力（生活）	A	・趣味や部活のおかげで，今もスポーツを続けている。
		・夜は必ず明日の準備をしてから寝ている。
		・小学校６年から現在まで欠席は０である。
		・手伝い（食器の片付け，そうじ，洗濯物たたみ，買い物等）を必ず毎日してくれる。
	B	・身の回りのことなど一通りはできる。
	C	・自分の体調のことは伝えられないが，身の回りのことは一通りできる。
	D	・中学校特別支援学級では楽しみがあったので，カレンダーやスケジュールを意識するようになった。
		・予定を知り，考えながら生活することができる。
	E	・一日，一週間の予定を聞いてくる。中学校や高等部でもやっているからだと思う。習い事がある日を理解している。

2　キャリア発達段階評価票の評定結果から見た中学校でのキャリア教育の効果

キャリア発達段階評価票の中学卒業時の評定結果と現在の評定結果を比較し，「卒業時の良好な状態を維持している場合」は◎，「卒業時より向上している場合」は○，「卒業時の状態より低下している場合」は△，「卒業時の未獲得状態のままの場合」は×と判定した。その判定数と割合を算出し，Table４のようにまとめた。以下に対象者毎に，キャリア発達段階評価票の比較結果から中学校でのキャリア教育の効果について検討した結果を示す。

（１）対象者Ａについて

中学卒業時の状態を維持しているキャリア発達に関わる能力・スキルが全体の82.1％，卒業後に向上している能力・スキルが7.1％と，全体的に良好な状態を維持していた。しかし，中学卒業時の状態よりも低下した能力・スキルが全体の7.1％，卒業時の未熟な状態のままの能力・スキルが3.6％見られた。具体的には，「人間関係形成能力・社会形成能力領域」の「意思表現」

や「場に応じた言動」,「キャリアプランニング能力(仕事)領域」の「情報の収集と活用」,「自己理解・自己管理能力領域」の「ストレスマネジメント」が低下，もしくは未熟な状態のままであった。

（２）対象者Ｂについて

中学卒業時の状態を維持しているキャリア発達に関わる能力・スキルが全体の50.0%，卒業後に向上している能力・スキルが8.9%と，良好な状態を維持していた能力・スキルは全体の約６割であった。また，中学卒業時の状態よりも低下した能力・スキルが全体の26.8%，卒業時の未熟な状態のままの能力・スキルが14.3%と，中学卒業時より低下したスキル・能力が２割を越えていた。特に「自己理解・自己管理能力領域」に含まれる能力・スキルや「課題対応能力領域」の「肯定的な自己評価」,「キャリアプランニング能力(仕事)領域」の「社会のきまり」,「キャリアプランニング能力（生活）領域」の「金銭の管理」に関わる能力・スキルの低下，もしくは未熟な状態が確認された。

（３）対象者Ｃについて

中学卒業時の状態を維持しているキャリア発達に関わる能力・スキルが全体の53.6%，卒業後に向上している能力・スキルが14.3%と，良好な状態を維持していた能力・スキルは全体の６割を越えていた。一方，中学卒業時の状態よりも低下した能力・スキルが全体の12.5%見られ，卒業時の未熟な状態のままの能力・スキルは19.6%であった。特に「人間関係形成能力・社会形成能力領域」の「他者理解」や「協力・共同」,「意思表現」に関わる能力・スキルの未熟さと低下,「キャリアプランニング能力(仕事)領域」の「仕事への理解」,「夢や希望」,「進路計画」などの将来の進路に関わる能力・スキルの低下と未熟さが目立っていた。

（４）対象者Ｄについて

中学卒業時の状態を維持しているキャリア発達に関わる能力・スキルが全体の30.4%，卒業後に向上している能力・スキルが28.6%と，良好な状態を維持していた能力・スキルは全体の約６割であり，特に卒業後にキャリア発達が促進していることが特徴的であった。また，中学卒業時の状態よりも低下した能力・スキルが全体の19.6%，卒業時の未熟な状態のままの能力・スキルが21.4%と，中学卒業時より低下したスキル・能力が２割近く見られた。特に「キャリアプランニング能力（生活）領域」の「金銭の管理」に関わる能力・スキルの低下や,「キャリアプランニング能力（仕事）領域」の「進路学習」,「仕事への理解」,「夢や希望」,「生きがい・やりがい」,「進路計画」などの将来の進路に関わる能力・スキルの低下と未熟さが目立っていた。

（５）対象者Ｅについて

中学卒業時の状態を維持しているキャリア発達に関わる能力・スキルが全体の41.1%，卒業後に向上している能力・スキルが19.6%と，良好な状態を維持していた能力・スキルは全体の約６割であった。また，中学卒業時の状態よりも低下した能力・スキルが全体の16.1%見られ，卒業時の未熟な状態のままの能力・スキルが23.2%であった。特に「人間関係形成能力・社会形成能力領域」の「意思表現」や,「キャリアプランニング能力（生活）領域」の「金銭の管理」に関わる能力・スキルの低下が目立っていた。

（６）対象者Ｆについて

中学卒業時の状態を維持しているキャリア発達に関わる能力・スキルが全体の89.3%と，全体的に非常に良好な状態を維持していた。しかし，中学卒業時の状態よりも低下した能力・ス

キルが全体の10.7%確認された。中学卒業時の状態よりも低下した能力・スキルは，特定の領域に偏っているわけでなく，最も高いキャリア発達段階の能力・スキルが中学卒業時よりも低下していた。

Table４　卒業前と現在とのキャリア発達の状態の比較

領域	◎	○	△	×	領域	◎	○	△	×
対象者A					対象者D				
人間関係形成・社会形成能力	11	0	2	0	人間関係形成・社会形成能力	4	5	0	4
自己理解・自己管理能力	2	1	0	1	自己理解・自己管理能力	0	3	0	1
課題対応能力	7	2	0	0	課題対応能力	2	6	1	0
キャリアプランニング能力(仕事)	20	1	2	1	キャリアプランニング能力(仕事)	9	1	7	7
キャリアプランニング能力(生活)	6	0	0	0	キャリアプランニング能力(生活)	2	1	3	0
合　計（%）	82.1	7.1	7.1	3.6	合　計（%）	30.4	28.6	19.6	21.4
対象者B					対象者E				
人間関係形成・社会形成能力	11	2	0	0	人間関係形成・社会形成能力	2	5	2	4
自己理解・自己管理能力	1	0	2	1	自己理解・自己管理能力	0	2	0	2
課題対応能力	3	1	2	3	課題対応能力	2	1	1	5
キャリアプランニング能力(仕事)	10	2	8	4	キャリアプランニング能力(仕事)	16	3	3	2
キャリアプランニング能力(生活)	3	0	3	0	キャリアプランニング能力(生活)	3	0	3	0
合　計（%）	50.0	8.9	26.8	14.3	合　計（%）	41.1	19.6	16.1	23.2
対象者C					対象者F				
人間関係形成・社会形成能力	4	3	2	4	人間関係形成・社会形成能力	11	0	2	0
自己理解・自己管理能力	1	0	0	3	自己理解・自己管理能力	3	0	1	0
課題対応能力	5	1	1	2	課題対応能力	7	0	2	0
キャリアプランニング能力(仕事)	14	4	4	2	キャリアプランニング能力(仕事)	23	0	1	0
キャリアプランニング能力(生活)	6	0	0	0	キャリアプランニング能力(生活)	6	0	0	0
合　計（%）	53.6	14.3	12.5	19.6	合　計（%）	89.3	0.0	10.7	0.0

「卒業時の良好な状態を維持」は◎，「卒業時より向上」は○，「卒業時の状態より低下」は△，「卒業時の未獲得状態のまま」は×

３　希望進路，将来の生活や就職への不安，今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキル

現在の学校を卒業した後の希望進路,将来の生活や就職への不安,今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルに関する回答を対象者毎に整理した。以下にその結果を示す。

（１）対象者Ａについて（Table５）

希望進路は進学後の一般就労であり，具体的な進学先や職種を思い描いていることが確認された。将来の生活や就職への不安については,「就職先があるか」,「周囲から理解が得られるか」といった就職に関わる事項を挙げていた。また，今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルは，ＰＣの操作スキルの習得や英語の学習，対人関係スキルの習得，人間関係などのストレスへの対処能力の向上を期待していることが明らかにされた。このことは，キャリア発達段階評価票の結果からも,「意思表現」,「場に応じた言動」,「ストレスマネジメント」が卒業時より低下もしくは卒業時の未熟な状態のままであったことと一致しており,保護者は「嫌なことがあったことは言えていると思うが，新しい場所でできるかは不安だ」と話していた。また，キャリア発達段階評価票の「情報の収集と活用」も低下しており，保護者の「ＰＣの操

作を身に付けてほしい」という回答からも，生徒を取り巻く新しい情報環境に対応する能力の向上も必要と感じていることが明らかにされた。

Table５　対象者Ａの希望進路や将来の不安，成長を望むキャリア発達に関わる能力・スキル

カテゴリー（回答数）	下位分類（回答数）	主な回答
進学先での学校生活(4)	楽しい(3)	・暗記が得意なので，科学基礎や地理の教科で高い点数がとれること ・スポーツ観戦が好きなので，高校野球やサッカーの応援に行くこと
	困っている(1)	・手先を使った作業が苦手なので，木工作業をすること
学校卒業後の進路(5)	一般就労(3)	・特例子会社の中でできる仕事 ・スポーツクラブのそうじや備品の整備 ・花や野菜を育てる園芸
	進学(2)	・障害者職業能力開発校 ・職業リハビリテーションセンター
将来の生活や就職への不安(2)	就職(2)	・M市内はＢ型事業所の数が限られているため，就職が難しいのではないか ・Ａ型事業所や一般就労の場合，周りの人から理解が得られるか不安
これから伸びてほしい力(5)	学習(2)	・ＰＣの操作を少しずつ身に付けてほしい。 ・英語（アルファベットやローマ字）の書きがもっとできるようになってほしい。
	生活(1)	・公共交通機関を利用した外出ができるように訓練したい。
	人間関係(2)	・苦手な人との関わり方や難しい課題をもらったときの対応等のＳＳＴをもっとしていきたい。 ・ストレスをためないように，何に困っていて，どうしてほしいかを伝えられるようになってほしい。

（２）対象者Ｂについて（Table６）

希望進路は一般就労であり，職場体験や好きなことから希望職種を思い描いていることが確認された。将来の生活や就職への不安については，「職場での人間関係」と，就職に関わる不安を挙げていた。保護者は，「進路の話をすると，嫌がって自分の部屋に逃げる」と語っており，就職が現実のものとなって迫ってくるにつれて，本人も将来への不安が大きくなっていることが窺えた。また，今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルとしては，公共交通機関等を利用したり，一人で外出したりすることができるようになることを期待していることが明らかにされた。このことは，キャリア発達段階評価票の結果からも，「社会のきまり」や「金銭の管理」が卒業時より低下していることと一致しており，実社会で使える力にまで育っていなかったことが分かった。

（３）対象者Ｃについて（Table７）

希望進路は福祉的就労であり，本人の特性をふまえた職種を希望していることが確認された。将来の生活や就職への不安については，「親亡き後の生活」に関する不安を挙げていた。また，今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルとしては，感謝や謝罪ができること，困っていることを伝えることができるようになることを期待していることが分かった。このことは，キャリア発達段階評価票の結果でも「他者理解」，「協力・共同」，「意思表現」が，卒業時の状態より低下，もしくは卒業時の未熟な状態のままであったこととも一致しており，特に，中学校卒業段階で「周囲や相手のことを思いやった行動」の形成に達しなかったことが，成長を期待する能力・スキルに関する保護者の回答に反映されていると考えられる。

Table６　対象者Ｂの希望進路や将来の不安，成長を望むキャリア発達に関わる能力・スキル

カテゴリー（回答数）	下位分類（回答数）	主な回答
進学先での学校生活(2)	楽しい(2)	・仲が良い友達と同じクラスになった。みんなゆっくりした子どもたちで，我が子に合っている。 ・友達と趣味が合う。
学校卒業後の進路(2)	一般就労(2)	・ものづくりの仕事 ・木工が好きで作業所での就業体験をして楽しかった。屋内がよい。
将来の生活や就職への不安(1)	就職(1)	・職場等での人間関係。
これから伸びてほしい力(3)	生活(3)	・行動力。例えば，自分でいきたいところに出かける。 ・人ごみに慣れてほしい。

Table７　対象者Ｃの希望進路や将来の不安，成長を望むキャリア発達に関わる能力・スキル

カテゴリー（回答数）	下位分類（回答数）	主な回答
進学先での学校生活(3)	楽しい(3)	・自分が好きなことを友達に話しているとき ・クラブ活動で卓球をすること ・自転車で登校すること
学校卒業後の進路(2)	福祉的就労(2)	・本人の特性と仕事内容，職場の人間（指導員）などを考え，本人に無理のないような仕事 ・木工や物作り
将来の生活や就職への不安(1)	生活(1)	・親亡き後の生活
これから伸びてほしい力(3)	生活(3)	・素直な心のままで，人に感謝できること。 ・困っていることを伝えられること。 ・間違ったとき，謝罪できること。

（４）対象者Ｄについて（Table８）

希望進路は福祉的就労であり，職場体験した施設の中から就労継続できる職種を見つけてほしいと願っていることが確認された。将来の生活や就職への不安については，親が老いたとき，親亡き後の生活などの不安を挙げていた。また，今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルとしては，一人で家事ができるといった生活スキルや様々な人との関わりといった対人スキルを身につけてほしいと願っていることが明らかにされた。このことは，キャリア発達段階評価票の結果でも「場に応じた言動」や「情報の収集や活用」，「金銭の管理」の能力・スキルが卒業時よりも低くなっていたり，未熟な状態のままであったりしていることや，「仕事への理解」，「夢や希望」，「進路計画」などの将来の進路に関わる能力・スキルの低下と未熟さが目立っていることと一致しており，そのために，保護者は「親亡き後の生活」に不安を抱いていると理解できる。

Table８　対象者Ｄの希望進路や将来の不安，成長を望むキャリア発達に関わる能力・スキル

カテゴリー（回答数）	下位分類（回答数）	主な回答
進学先での学校生活(4)	楽しい(3)	・音楽クラブ（週２日）を楽しみにしている。太鼓やダンスを練習し，夕涼み会，文化祭で発表している。 ・年に１回の校外学習を楽しみにしている。 ・10月の修学旅行を楽しみにしている。
	困っている(1)	・体育館が怖い。
学校卒業後の進路(2)	福祉的就労(2)	・実際に体験したところから継続できるような職種を見つけてほしい。 ・作業の仕事。作品制作の仕事。
将来の生活や就職への不安(4)	生活(4)	・親が年を取った時の生活。 ・グループホーム等での自宅以外の生活。グループホームに空きが少ないこと。 ・親亡き後の生活。 ・兄弟への負担と支えあい。
これから伸びてほしい力(2)	生活(1)	・身の回りの生活をするうえで，家事を自分一人でできるようになってほしい。
	人間関係(1)	・いろいろな場面や人数で人と接することができてほしい。

（５）対象者Ｅについて（Table９）

保護者が考えている進路は福祉的就労であるが，本人は親と同じ仕事をしたいと言っていることが確認された。将来の生活や就職への不安については,「親亡き後の生活」や「就職のこと」に関する不安を挙げていた。また，今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルとしては,「困っていることを伝えられるようになってほしい」,「被害を受けることがないように，異性との交際について理解してほしい」と語っていた。キャリア発達段階評価票の結果でも，キャリア発達段階が全体的に低く,「意思表現」や「金銭の管理」も卒業時より低下していた。金銭管理については，保護者も「予算内での買い物が難しい」と語っていた。そのために，保護者は，就職のことや親亡き後の生活に関する不安を抱いていると理解することができる。

Table９　対象者Ｅの希望進路や将来の不安，成長を望むキャリア発達に関わる能力・スキル

カテゴリー（回答数）	下位分類（回答数）	主な回答
進学先での学校生活(2)	楽しい(1)	・勉強が楽しい。特に作業学習でのジャムづくりなどの加工作業。中学校では苦手だった。
	困っている(1)	・１回だけ，攻撃的な生徒と同じクラスで困っていることがあった。今は違うクラス。
学校卒業後の進路(1)	福祉的就労(1)	・身近な人と同じ仕事をしたいと言っている。以前，私の職場に連れて行ったことがあるからかもしれない。
将来の生活や就職への不安(2)	生活(1)	・生活のことが不安である。親がいなくなってからのこと。
	就職(1)	・就職のことが不安である。一般就労やＡ型事業所かＢ型事業所になると思う。
これから伸びてほしい力(3)	意思表現(2)	・困っているとき，困っていることを伝えることができるようになってほしい。 ・「教えて」は言えるようになってほしい。
	性の理解(1)	・男女交際について，被害を受けないような力を付けさせたい。

（６）対象者Ｆについて（Table10）

希望進路は一般就労であり，具体的な職種を思い描いていることが確認された。将来の生活や就職への不安については，「療育手帳の更新可能性について」，「人間関係」，「問題が生じたときの対処」といった生活に関する事項を挙げていた。今後の成長を期待するキャリア発達に関わる能力・スキルについては，保護者は「自己ＰＲが苦手なので履歴書を書くことが苦手」，「携帯ゲームで生活リズムが崩れる時がある」，「ふりかえりは甘い」，「年金制度や療育手帳に関する知識を習得してほしい」と語り，今後の社会人としての生活に関わる知識やスキルの習得を望んでいることが明らかにされた。キャリア発達段階評価票の結果からも，「自己理解・自己管理能力領域」に含まれる「自分の性格，趣味，適性，短所などが分かる」の評価が卒業時よりも低下しており，そのことが「履歴書を書くことの苦手さ」と関連していると理解できる。また，「課題対応能力領域」に含まれる「活動をふりかえり，新しい目標を設定できる」や「自己評価をもとに次にどうすればよいかを考えることができる」の評価も卒業時よりも低下しており，そのことが「ふりかえりの甘さ」や「生活リズムの崩れ」に関係していると理解できる。

Table10　対象者Ｆの希望進路や将来の不安，成長を望むキャリア発達に関わる能力・スキル

カテゴリー（回答数）	下位分類（回答数）	主な回答
進学先での学校生活(6)	楽しい(4)	・部活動をやり遂げた。
		・友達と仲良くできること。
		・修学旅行ではリーダーとして，リードしながら楽しんだ。
	困っている(2)	・部活の帰りが遅く，疲れから居眠りがよくあった。
		・部顧問の先生の矛盾した言動の指導に対して悩み，辞めそうになったが，乗り越えることができた。
学校卒業後の進路(3)	一般就労(3)	・市役所
		・製造業
		・医療関係
将来の生活や就職への不安(3)	生活(3)	・手帳をいつまで持っていられるのか心配。２年間更新の際になくなったら，採用は取り消されることがあるのか。
		・周りの人とのかかわり
		・知らないことがあった時の対処（領収書が分からずにアルバイト先のお客様ともめたことがある）
これから伸びてほしい力(5)	生活(4)	・履歴書を書くことに苦労している。自己PRが苦手。
		・携帯ゲームで生活リズムが崩れる時がある。
		・ふりかえりは甘い。
		・年金等の制度や手帳に関する勉強。
	運動(1)	・今年フルマラソンに挑戦するので，体力をもっとつけてほしい。

Ⅳ　考察

本研究では，中学校知的障害特別支援学級の卒業生の保護者に聞き取り調査や質問紙調査を実施し，中学校知的障害特別支援学級におけるキャリア教育の成果を検討するとともに，今後の知的障害特別支援学級におけるキャリア教育を改善していく視点を検討した。

その結果，保護者は，将来の就労や自立に必要となる人間関係づくりのスキルや生活スキル

の向上を図るために，教科の学習や合わせた指導のなかで繰り返しリハーサルし，校外学習や就業体験学習のなかで実体験を積むような指導を高く評価していることが明らかになった。また，作業学習や行事等の特別活動のなかで，計画を立てたり，責任をもって与えられた役割を果たしたりする取組や，生徒の興味関心を広げ，将来の趣味につながる活動を通して，就労後の生活を支える余暇活動の充実を図る取組に対する評価も高かった。以上のことから，卒業生の保護者は，中学校知的障害特別支援学級におけるキャリア教育が卒業後の進学先での学びや家庭での生活に役立っていると感じていることが明らかにされ，中学校３年間のキャリア教育では，体験的な学習をさらに充実させ，計画的に実施していくことが重要であると示唆された。

一方，キャリア発達に関する能力やスキルを実生活や今後の就労場面で使える力になるまで伸ばし，卒業後も維持させることが可能なキャリア教育の内容や方法については，検討と改善が必要であることが確認された。例えば，対象者Ａは，「情報の収集と活用」の能力・スキルが中学校卒業時よりも低下していた。その理由として，中学校の指導において当該能力・スキルの十分な獲得を促すことができておらず，時間の経過とともにその能力・スキルの維持が難しくなったことが考えられる。また，対象者Ｆは，「自己理解」が中学校卒業時よりも低下していた。これは，成長に伴って，社会から「より深い自己理解」が求められるようになってきていることによる評価の低下と理解することができる。

以上のことから，対象者Ａや対象者Ｆのような，中学校段階で既に一定以上のキャリア発達が認められるような生徒に対しては，キャリア発達に関する能力・スキルの向上と維持を促す指導だけでなく，今後の社会生活を見通して，より高度で複雑な能力・スキルの獲得を促したり，身につけた能力・スキルを実生活に生かす応用力を高めたりする指導も必要であると考えられる。また，進学先・就労先・支援機関との連携の充実も図り，卒業生のキャリア発達の状態に関する情報を進学先や就労先，支援機関に提供し，指導と支援を引き継ぐことも必要である。生徒の実態に関する正確で詳細な情報を提供し，切れ目のない指導と支援が可能になれば，卒業後のさらなるキャリア発達の促進が可能になると考えられる。したがって，中学校から進学先に引き継がれる個別の教育支援計画や個別の指導計画に，特別支援学級におけるキャリア教育の取組内容や各生徒のキャリア発達状態の評価結果も反映させて，進学後の指導が円滑に行われるようにすることが求められると言える。

対象者Ｂ・Ｄ・Ｅは，「金銭の管理」が中学校卒業時よりも低下していた。その理由として，中学校という構造化された環境のなかであればできるようになっても，実社会のなかで実際に使える力にはなっていなかったためと考えられる。対象者Ｃは，「キャリアプランニング能力（仕事）領域」の将来の進路決定に直接関係する能力・スキルが中学校卒業時よりも低下していた。これらの能力・スキルは，キャリア教育の中核的な内容であるが，その能力・スキルが保護者から見て不十分と思えるような状態であるということは，保護者が「親亡き後のわが子の生活」を憂うる大きな要因になると言え，今後のキャリア教育を考えていく上で非常に重要な課題である。

このようなキャリア教育の中核的能力・スキルが未熟であったり，生活スキルが未熟で実社会では活用できない状態にあったりするような生徒に対するキャリア教育では，学校と家庭との情報共有と連携が不可欠であると考えられる。藤井ら（2014）も，家庭は社会性や日常生活のスキルを獲得させるための効果的な実践の場と捉えて，生徒のキャリア形成と職業的自立に向けて，学校と家庭が連携した取組が必要と指摘している。この指摘からも，キャリア教育の実

施にあたっては，家庭との情報交換と情報共有を密にし，連携をより深めていく必要があると言える。しかし，保護者自身も親亡き後のわが子の将来に不安を抱きながら子どもの将来像を模索している段階である。したがって，その保護者の思いや不安に寄り添い，保護者自身が就労先や支援機関に関する情報を得る場も保証しながら，各生徒のキャリア発達上の課題を家庭と学校が共通認識し，同じ将来像を描きながら二人三脚で指導・支援していくことが大切であると考えられる。

ところで，本研究は中学校知的障害特別支援学級卒業生６名の保護者を対象としているため，調査結果を一般化して論じるにはデータ数が少なすぎる。また，いずれの対象者もまだ学校段階にある生徒であり，高等学校や特別支援学校高等部を卒業し就労を果たした社会人ではない。そのため，本研究から示唆されたキャリア教育の改善の視点が，本当に卒業生の将来の社会的・職業的自立の充実につながると断言することはできない。したがって，今後も追跡調査を継続し，卒業後の進学先での学びや生活の様子から中学校知的障害特別支援学級でのキャリア教育の成果と課題を明らかにするだけでなく，その後の社会人としての生活状況や職業的自立の状態からも中学校知的障害特別支援学級でのキャリア教育の成果と課題を明らかにしていかなければならない。

Ⅴ　文献

中央教育審議会（2016）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）.

藤井明日香・川合紀宗・落合敏郎(2014)特別支援学校（知的障害）高等部進路指導担当教員の就労移行支援に対する困り感－指導法及び教員支援に関する自由記述から－．高松大学研究紀要，60・61，111-128.

藤井朋子・小田原舞・西　勉・向井紋子・林　孝・若松昭彦(2016)中学校特別支援学級における社会的・職業的自立を目指した生活力を育成するためのカリキュラムの研究開発．中学教育研究紀要，47，83-106.

日野文貴・村社弘之・矢動丸博子・的野美穂子・外山千佳・児玉かおり・山田慧美・信時大輝・戸ヶ﨑泰子（2016）発達段階に応じた体系的なキャリア教育の試行－自分らしい生き方をする子どもの育成をめざして－．宮崎大学教育学部紀要教育科学，87，39-51.

宮崎県教育委員会(2017) 平成29年度宮崎県学校基本統計.

宮崎県教育委員会(2018) 平成30年度宮崎県学校基本統計.

文部科学省（2017）特別支援教育資料（平成28年度）.

文部科学省（2018）特別支援教育資料（平成29年度）.

文部科学省(2018)特別支援学校教育要領・学習指導要領.

定岡孝治(2017)特別支援学校（知的障害）高等部卒業後の生徒に対する職場定着支援－職場定着支援からみた職業教育の在り方－国立特別支援教育総合研究所研究紀要，44，13-26.